明治学院大学キリスト教研究所
ニュースレター

明治学院大学図書館
2010.7.26

あんげろす

ヘボンの聖書和訳 ―ひとつの訳語をめぐって―

鈴木 進

「義に飢え渇く人々は、幸いである」(新共同訳)。わたしたちは今日ここが「義」と訳されていることに、特にこだわりを覚えない。しかし、ヘボンは最初の聖書和訳に当たってこの訳語に悩んだように思われる。ローマ字 Matai den は"...tadashiki wo sh'to mono.."と訳し、その後の『馬太傳福音書』においてもやはり「ただしきを したふもの」と前訳を踏襲している。欽定訳では righteousness が使われているが、『和英語林集成』初版「英和の部」にこの語を引くと、驚くなかれ、RIGHTEOUS, I know of no word in the Japanese language answering to this word or to the word Righteousness.とあり、日本語の訳語は載っていない。聖書の δικαιοσύνη の意味内容は日本語の「義」では表現できないと考えたのではなかろうか。

聖書を日本人に、可能な限り正しく伝えようとした博士の翻訳姿勢をうかがい知るように思えるのである。

第52号
2010年7月